
噂の百合ちゃん

琴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噂の百合ちゃん

【Nコード】

N5203Q

【作者名】

琴香

【あらすじ】

「最強の女」と恐れられる、その少女は恋をしていた。

「最強の女」

「ハア…ハア…」

—その少女は持っていたパイプを投げ捨てた。足元には、複数の屍達…。

「……ハア…。」

見上げた空は朱色に染まっていた—。

《噂の百合ちゃん》

「ねえ、聞いた？」

「何が？」

「1年A組の篠原百合。昨日も、喧嘩売ってきた隣の高校の複数の男子を1人で倒しちゃったんだって。」

「え？うそ。」

「本当本当！！相変わらず最強だよな。」

「でも、篠原さんさ。喧嘩ばかりで疲れないのかなあ？」

「さあ？「最強の女」に疲れとかは無いんじゃない？」

『でも、女の子』として…どうなんだろうね…。』

—ああ…もう噂になってるよ……。

噂をしていた女子2人の話の内容に、少女はため息を漏らしてしまった。

少女の名前は篠原百合16歳。

後ろ斜めの高い位置に縛った長い髪を垂らし、頬には絆創膏が貼つてある。さっきから噂されている人物張本人だ。

百合は、ぐると周りを見る。よく見ると皆こっちを見ていて、目が合えば逸らされた。

「…ハア」

今日2度目のため息。

一気にだるくなった体を引きずる様に、自分の教室を目指した。

く最強の女と恋く（前書き）

百合の幼なじみも登場！！

…そして、その幼なじみ何となく可愛いそうです（笑）

く最強の女と恋く

《噂の百合ちゃん》

『1、A』と書いてある扉の前に立ち、小さく深呼吸してから扉を開ける。

ーガラッ

「百くく合くくく!!!!」

目の前に、男が飛び込んできた。その男は満面の笑みで

「おはよう!!」

と言ってきた。百合は、そんな男を冷めた目で見ながら、

「邪魔。」

「ブッ!」

グイッと目の前にいる男を手で退けた。

すると、その男はシクシクという擬音が合いそうな感じに、うなだれながらその場に座り込んだ。しかも体育座りで。

「...酷いよ...百合...。」

「……たく、朝から何だってんだよ…。」

男の余りの悲壮感に、流石の百合も立ち止まり振り返る。

「百合が『おはよう』って言ってくれれば良いんだよ!」

涙を目に溜め、睨みながら言う男に若干イラツとしつつも

「…おはよう……優。」

「優」と呼ばれたその男は、百合の挨拶を聞いた途端、今まで泣いてたのが嘘の様な笑みで、

「よし!OK!」

「うるせえ、黙れ。」

「ヒドッ!!--」

倉沢優。百合の昔からの幼なじみで、茶色の髪を少し縛っていて、つり目が特徴的だ。

一通り話し終えたところで、百合は自分の席に着き鞆をあさる。

「あ、そっといえば噂聞いたよ、百合。」

「……………」

「また男子搦じ伏せたんだって？ 凄いね。流石『最強の女』。向かう所敵無しだね！」

「うるせえな。優には関係無エだろ。」

そう――。

俺は、高校入学したての頃2人の男子に絡まれてる女の子を見て、いてもたってもいられなくなり、その2人の男子を1人で倒した。その日から、色々な奴に喧嘩を売られ全勝してる。

そっから何か『最強の女』として恐れられる存在になった。

…で、今も我よ我よと喧嘩売ってくる奴等がいる…。んで、全勝している。

そんな事を思い出していると、優はハア〜というわざとらしい溜め息をついた。

「……………何だよ。」

「あのさ〜百合。俺が言うのもどうかと思うけどさ。いくら喧嘩ばかりだからって、もっと女の子らしくした方が良いと思うよ。」

「お前は俺の母ちゃんか何かか？」

半分キレながら百合が答えると、優はズイツと顔を近づけペラペラと喋りだした。

「例えば、お化粧するとかオシャレするとか、あ、後その男口調と、1人称も「俺」じゃなくて「私」とかにするとか…」

「優…。」『黙る』という言葉を知ってるか？そして近い。」

そんな百合の冷たい言葉を優は無視して、後は…っと思いついてる。

「…あ！恋をするとか！」

—ピクッ

百合は無言のまま、優の胸倉を掴み、そのまま投げ捨てた。衝撃で優の上半身は床にめりこむ。

「うるせえって言うてんだろ！さっきから！！」

ったくーっと、優に対してまだ言おうとしていて、たまたま窓から校庭を見ると、

「—…！！—」

その瞬間、百合は走りだし急いで教室を出た。

ハアッハアッ

息を荒くしながら、猛スピードで走り、誰かを見つけると急いで壁に隠れた。

（い…いた…。木下先輩）

そう百合が校庭で見つけ、急いで外に出たのは、現在片思い中の木下英介先輩を見つけたからだ。

（今日もカツコイイな…先輩…）

木下は、3年生の先輩で生徒会会長。ルックスも良く、温厚な性格で女子にも男子にも人気だ。

（やっぱり俺と先輩じゃ月とスッポン…「へえ」。百合って、あいつの事好きなんだ。」…！！）

ドガッ！！

「ぐはっ！！！」

いつの間にか、優が背後に居て、つい後ろ回り蹴りをしてしまった。

「あ…すまねえ。優。つい背後取られると…」

地面に転がりながら悶絶してる優に謝罪する。

「い……いいよ。大丈夫。それより愛しの先輩いなくなってるよ。」
「な……何が愛しだ!!………って!え!?!」

勢いよく、視線を戻すと、そこには木下の姿は無かった。

「……ああ……。」

「それにしても、百合が木下の事好きなんて意外〜。」

「……うるせえな。いいだろ、お前の望み通り恋してるんだから。もうほっといてくれ。」

「……。」

木下を最後まで見れ無かったショックを隠しきれない百合。今は優の相手なんて出来ない。

「……どこ?」

「………は?」

「木下の、どこ好きになったの!?!」

「…別にどこでもいいだろ。」

「いいから!!」

「……………」

何故か怒った風な口調の優の迫力に押され、ポツリポツリと話しました。

「…優しいし、カッコイイし、それに前、一緒になって俺の探し物探してくれたんだよ…。」

それで好きになった。と言うと、優は眉間に皺を寄せて、ふうん。と呟いた。

「…でも、俺あいつ嫌い。」

「てめえの好き嫌いは知らねえよ。第一恋しろって言ったのてめえだろ！…ったく…」

ぶつぶつ呟きながら教室に校舎に戻る百合。その背中を見つめ取り残された優は、

「…確かに言っただけ…。」

そう呟き、百合に蹴られた所を押さえ、その後を追った。

「最強の女と恋」(後書き)

百合の片思いしてる男の名前どうしようかと悩みましたが、「木下英介」という、ん…汗みたいな感じになってしまった！

もっと小説上手く書ける様になりたいです…。

く最強の女とデートく（前書き）

主に百合と優の会話です。

木下少ししか出番ありません；

「最強の女とデート」

『ねえ聞いた？篠原さんの事なんだけど、また1人でやつつけたらしいよ。』

『今度は何人？』

『7人だつてさ。』

——早い。相変わらず情報網が早い…。

《噂の百合ちゃん》

「…ったく。何だつて昨日の事がもう知れ渡ってるんだ？」

（木下先輩にも伝わってしまっただろうか…。）

朝からブルーな気持ちになりながら、歩を進める百合。そしてポケットをあさる。カサツと紙と紙が擦れる音。

（どっしり…）

モヤモヤした気持ちのまま教室の扉を開ける。

「おっはよ～～！百合！」

「……………はよ。」

扉を開けた瞬間、抱きついてこようとする優を上手くかわしながら、一応挨拶をする。

「百合が挨拶してくれた～～！！」

ワ～イっと、それだけで喜んでる優に、周りから哀れみの視線が向けられている事は本人も知らない。

「あっ！噂聞いたよ！相変わらず凄いね～～。」

「だまれ。」

「イタツ！！！！何で叩くのさ～～！！」

優がブーブー言ってるのを無視して、百合はポケットから2枚の紙を取り出す。

「あ！それって、最近新しく出来た遊園地のチケットー！」

「…福引きの景品で当たったんだよ。遊園地のペアチケット…」

「…もしかして木下誘うの…？」

「…まあ…でも、こんな噂立ってるんじゃないや当分誘えそうにねーな。」

フウと、息を吐き机に突っ伏す百合。そんな百合を見て優は、また眉間に皺を寄せる。

「デートはまだ早すぎだよ…。」

「だよな…。まともに喋った事なんて、そんな無いし…。」

「いや…まあ…そ、そうなんだ…あんま喋った事無いんだ…。」

「？…ああ、まあな。」

優の挙動不審に少し不思議に思いながら、チケットを見る。

「俺みたいなのが、先輩好きになったのが間違いだったのかなあ…。」

「あ。今の台詞乙女っぽい！」

「うるせえよ。」

そう言うのと、また机に突っ伏す百合。優はそんな百合を見て、少し周りを見てから小声で、

「……どうせ木下と行かないんだったら俺と行かない……？今週の土曜日辺り……。」

「………は？お前何言って「百合！コレは練習だよ！！いざって時の！！」……れ、練習……。」

優とチケットを交互に見ながら、そうかっと思く。

「そうだよな……。もし本番が来た時に失敗したりするの嫌だしな……。このチケットは無くなっちまうが……練習に使うのも良いかもな。」

そう言うのと、優は嬉しそうに笑い、

「じゃあ……今日の帰り、服買おうよッ！」

「はあ？何で？」

「デートの時の服選びだよ。」

「いや別に練習なんだし」「よし！決定〜！！じゃあ帰りね！」あ！
ちよッ…優！！」

百合が止める間も無く、優は上機嫌で自分の席に戻った。

「……………何なんだ…？あいつ…。」

—昼—

『木下先輩〜！あの〜一緒にお昼ご飯食べませんか？』

『木下くん！！コレ…食べて！』

（凄エ……………。）

百合が屋上で昼ご飯を食べようと、屋上へ行く途中大きな人だかりが出来ていたので、何かと思えば…。

(…やっぱり人気だな…。木下先輩…。)

遠くからその様子を眺めていると…。

「あれ…？篠原さん？」

「！……！！」

木下が百合に気づき、人だかりを割りながら百合に近づいてきた。

「やあ。あの探し物を探した日以来…かな…？」

「うえ…あ！…そ、そうだな…です…。」

つつい緊張してしまい、変な喋り方になってしまった。

「あ、そろそろ友達のとこ戻らないと…。じゃあね！篠原さん。今度また色々話そうね！」

「！……は、はい！」

爽やかに走り去って行く木下と、その後を追う女子達。

（せ…先輩と喋れた！っていつか先輩…あんな噂が立ってるのに俺が恐くないのか…？）

その場にボゥッと立ち尽くしていると、

「先輩と喋れたじゃん。良かったじゃん。」

―ドガッ！―

「ぐはっ！…！…！」

「何でまた背後に居るんだよ優！また思わず蹴っちまったじゃないか…！」

前と全く同じパターンで、優が悶絶している。因みに今回は百合から謝罪の言葉は無い。

「もう…！百合！早く屋上行こうよ！時間無くなっちゃっ！…！」

「お前回復力凄エな。」

百合の手を引つ張る優にさっきまで悶絶してたのにと心の中で思う。

「……………なあ。優。」

「ん？」

「……………俺……。先輩と話す事出来たぞ……。」

「………そうみたいだね。」

優は、そう呟いた後百合の手を強く握りしめた。

「……………優……？」

「……………帰り………楽しみにしてるからね……。」

「あ……………ああ。」

二人の間に沈黙が走り、学校のチャイムがやたら大きく響いた気がした――。

く最強の女とデートく（後書き）

なんというか、グダグダな感じになってしまいました；

もっと上手く書ける様になりたいです…；

く最強の女とショッピングく（前書き）

おおー！！今回は木下けっこっ出てる！…かな？（笑）

「最強の女とショッピング」

――帰り――

（何か今日の優は変だったな……いつも以上に。）

校門で優を待つ、百合は1人思う。因みに優は先生に呼ばれていて、それを待っている。

――すると

「あ。篠原さん。」

「……!!……せ、先輩!」

生徒会の集まりが終わった木下が門に居た百合に気づき、声をかけたのだ。

「誰か待ってるの？」

「は…はい。優を…」

「優？」

「俺……わ、私の隣によく居る茶髪の男です…。」

「ああ！」

そう頷くと、これまで笑顔だった木下は無表情になり、

「…いつも僕を睨んでくるあの男か…。」

「あの木下先輩？」

「ん？」

無表情になったかと思うと、またいつもの爽やかな笑みに変わっていた。

「あ…いえ、何でねえ……何でもないです。」

「そう?」

(…可笑しいな…。さっき一瞬木下先輩の表情が険しくなった気がしたが…気のせいかな?)

百合が心の中で悩んでると、木下はそんな百合を見て笑顔で話しかけた。

「ねえ、篠原さん。優くん…だっけ?まだ来ないなら一緒に喫茶店でも行かない?」

「え!!!??」

木下からの誘いに、百合は驚いた。

(う…嬉しい!!!木下先輩からの誘いなんて…!……でも…)

百合は俯き、バッグの取っ手を握りしめながら泣きそうな顔で言った。

「あの…お誘いありがと…う…ございます。でも俺…私なんかと居たら先輩にも目をつけられると思う…思いますし…」

「ああ、別に「百…合…」！！」

木下が何かを言いかけたところで、怒った様な表情の優がズカズカとこちらに歩いてきた。

「あ！優！」

「早くショッピング巡りするよ！！」

優は百合の腕を掴み、さつさと門から離れた。

「あ！…先輩！さようなら！」

大分遠くなった先輩が笑顔で手を振ってくれたのが分かった。そして、百合は優の方へと向き直り、

「優！いい加減、腕離せ！」

「良かったじゃん！先輩と喋れてたじゃん！」

「…ああ。…でも緊張しちまった…。やっぱり練習が必要だな…。」

百合が呟いていると、それまでズカズカ歩いていた優は足を止めた。

「…なあ、優。今日お前変だぞ…。いつも変だが…」

「……酷いな。百合は！」

そう優が言つと、今まで痛いほど握っていた腕を離し、怒気の無い、いつもの声で百合に言った。

「さ！俺のせいで少し遅くなっちゃったけど、洋服屋さん行こうか。」

「お、おう。」

「あ！ちよつと先歩いてて！靴紐取れちゃってる…。」

「分かった。」

ひとまず、いつもの優に戻って安心した百合。その後ろ姿を見つめながら、優は小さな声で呟く。

「……ほんと…酷いよ百合は…。」

その表情は哀しげに歪められていた。

―洋服屋―

「ねえねえ！百合！この服はどう？」

そう言って優が持ってきた服は、胸元がガッツリ開いた淡い紫色のキャミソールだった。

「んな！んなもん着れるわけねえだろ！！」

「痛ッ！もーいちいち叩かないでよー。冗談だよ冗談！」

ちえーとか言いながら服を元の場所に戻す優。

(…冗談のわりには、めちゃくちゃ残念そうじゃねえか…?)

そう内心で思いつつ、百合は色々な服を見る。

「このパーカーはどうだ？」

「それ男物じゃん！」

「じゃあ、このＴシャツなんてどうだ？」

「ちょ…このシャツどこから持ってきたの？白と黒の模様なんて囚人服みたい……あゝ！もうしょうがない！！俺が選んであげるよ！」

「す…すまねえ」

はつきり言つと、百合はオシャレなどはした事が無く、オシャレに關しての知識は無かった。

「コレと…コレと…あ、この店靴も売ってたよね？そっちも見に行

「うー」

「…おう。」

「…何？」

「いや…これほどまでにお前が頼れる存在だったなんて…。」

「…!!」

「俺…オシャレとかに疎いから…頼れるなって思ってたな。」

「そ、そうかな？」

「ああ！お前が居てくれたらもし本番が来ても全然大丈夫だ！」

「……………」

それまで照れながら笑ってた優だったが、百合のその言葉を聞いた瞬間笑顔は消えた。

「…そう。とりあえず靴のとこ行こう。」

（あれ？）

スタスタと百合の前を歩く優に、俺変な事言ったか？と悩む百合。

そして――

「ん……。こんな感じか？……おい優！準備出来たぞ。」

「お！じゃあカーテンオープン……。」

優は言葉を無くし、そして顔を赤くした。

「……やっぱ変か？」

「いや！全然！！」

百合は今、優が選んだ服、靴を試着している。

グレイッシュピンクのフリルが付いてる七分のトップスに、黒色のツイードパンツ、こげ茶色のロングブーツ、オプシオンとしてハートのネックレスをしている。

「そ……そうか変じゃないか……。じゃあコレ買おうかな。」

「あ、じゃあ俺お金払うよ！」

「は！？別に良いよ。」

「いや、俺が無理矢理ショッピングに誘ったんだから俺に払わせて！」

百合は目を見開き、財布を鞆から取り出している優を見る。

「…あ、あんがとよ。」

「……！……百合がお礼言ってくれた！」

「……。」

それだけで喜ぶ優を哀れみの目で見つめながら、少し見直したのは間違いだったか……と心の中で思う百合。
服を一旦脱ぎ、優が会計してるのを見ていると……

『あれって篠原百合じゃない？』

『え？うわ！ほんとだ！恐い！！』

……つるせえな。丸聞こえなんだよ。

遠くから聞こえる声に心の中で悪態をつく百合。

「会計終わったよ。…アレ？どうしたの？そんな険しい顔して。」

「……別に……」

会計を済ませた優は、百合が不機嫌な事に瞬時に気づいた。

「フーンそっか。はい、服。早くお店から出よ。」

「ああ……。」

「あゝ！！もうこんな時間じゃん！もっと店周りたかったんだけど……。」

「お前が来るのが遅かったのが悪い。」

「チエ……。あ！俺ん家こっちだから！じゃあね！」

「ああ。」

「……………」

——チュッ

「…え？」

頬に何か違和感が… っと思いきちらを見ると優の顔がアップであった。

「じゃあね!!」

優は頬から唇を離し、呆然としている百合を置いて上機嫌で手を振りながら帰ってしまった。

しばらく固まっていた百合だったが、自分の頬を触りボンッと顔を赤くしてその場にうずくまった。

「あんの馬鹿野郎!!」

もう見えなくなった優を睨みながら、百合はしばらくの間うずくまっていた。

く最強の女とショッピングく（後書き）

ちょっとは進展したでしょうか…？

けっこうとは言っても、やっぱり少ししか出てきてない木下。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5203q/>

噂の百合ちゃん

2011年10月8日15時59分発行